

ク マ ヅ!

COOL MASOCHIST

つけて
生徒会長

小説 栗栖ティナ
挿絵 大空樹

立ち読み版





登場人物紹介

Characters

尋ねてきた目的は、私を脅迫に来た……
という事でいいのかな？

ほしのみやまりあ

星乃宮舞梨亞

桐生学園の才色兼備の生徒会長。歴代最高の生徒会長と称えられ、男女問わずに絶大な人気を誇る。しかし、そんな彼女には隠れた秘密が……？



エッチな雑誌を学園に持ってくるなんてサイテーッ!



きつたかあんじゅ
橘高杏樹

書記として生徒会の活動をしている。陸上部にも所属しており、活発な少女。最近、失敗が多くて舞梨亜によく怒られているようで……。

さいぎょうじりん な
西行詩凜菜

桐生学園の副会長を務める令嬢。おっとりとした母性的な人物で、Fカップもの爆乳に注目を浴びるのが恥ずかしいと感じている。



二人だけの秘密って凄くドキドキしますね♪

きしゅうと
岸優斗

本作の主人公。偶然、舞梨亜の秘密を知ってしまい、生徒会の手伝いをするようになった。

序章	風のイタズラ	007
一章	生徒会長のヒミツ	017
二章	新米ご主人さまの憂鬱	049
三章	初めてのお散歩	084
四章	甘いお仕置き	126
五章	三美姫の蜜月	172
終章	しつけて、ご主人さま	221

その声色が、やはり先程の光景がタチの悪い幻覚だったのだと確信させてくれた。優斗はホッと小さなため息を漏らし、今度は落ち着いて扉を開けて中へ入る。

「失礼します。あの、星乃宮会長、少しお話が……あり……ま……す……」

「ふふっ、落ち着きがないね。急に飛び出していったから、何事かと思ったよ。話があるなら、まず扉を閉めてくれないか？ 何せ……この格好だからね」

「あっ、は、はい。あの、その!!」

慌てふためきながら、優斗は言われるまま後ろ手で扉を閉め……改めて、正面、窓際に立つ憧れの生徒会長の方を凝視する。

右手で目を何度も擦り、瞼がだるくなるくらい瞬きを繰り返す。だが……それでも尚、瞳に映るその幻覚が消える事はなかった。

何だ……これは。僕は……夢でも見ているようだ……。

「どうしたのかな？ 何をそんなに慌てているんだい」

「いや、あ、あ、慌てるって……そりゃ、慌てますよ!! そ、その格好!」

「亀甲縛りなんて、さほど珍しいものでもないと思うけど」

相変わらず平然としている生徒会長の口から飛び出した、その清楚な雰囲気とかけ離れた単語。確かにそれは、エッチな雑誌やDVDをさほど見た事がない優斗でも耳にした事がある、有名なSMプレイの一種。問題は、ここが生徒会室の中であり、それを見られたクールな生徒会長がまるで取り乱していないという事だ。

「あの、ど、ど、ど、どういう事なんですか！　ここ、せ、生徒会室ですし、それに僕が……み、見ちゃったのに！　何で見た僕の方が驚いてるんですか!!」

「落ち着いてくれ、岸優斗くん。そう慌てていては、説明もできないじゃないか」

「あつ、す、すいません——つて、あの！　い、今、僕の名前を!!」

窘められ、反射的に頭を下げた直後、小柄な少年は憧れの人の口から自らの名前が飛び出した事に気付き、思わず顔を強張らせた。

「生徒会長として、学園の生徒の顔と名前を覚えるのは、当然の仕事だよ。ましてや君の事は、この数日ずつと注目していたしね」

そこで言葉を止め、シャギーの入った長い髪を軽くかき上げながら、舞梨亜はゆっくりと立ち上がり、入口傍に立ち尽くす少年の傍へ歩み寄っていく。

「それにしても、君とはとことん不思議な縁があるらしいね。今まで、誰にも見つからなかった秘密を、こんな短期間に二度も見られてしまうなんて」

「ひっ、あつ、二度？　あの、朝礼の時、やつぱり……あつ……」

落ち着き払う生徒会長と裏腹に、優斗は最早^{もはや}まともに言葉も紡げないくらい、情けなく慌てふためくしかなかった。

「少し、深呼吸でもして落ち着いたらどうだい？　気付けに苦いコーヒーでもご馳走してあげたいところだが、生憎^{あいにく}、ここにそういった嗜好品は用意していないんだ」

「そんな、お氣遣いなく！　いや、すぐに落ち着けるわけじゃないですつて!」

「見るのは二度目だろう？ あ朝礼の時も、私は同じ格好をしていたのだから。もつとも、ここまですべてを曝け出していたわけではないけどね」

普段と変わらぬ落ち着きのある声で呟きながら、舞梨亞はおもむろに自らの指で胸の上を通る縄を摘み上げた。

太い縄が下の方へ引つ張られると、ゼリーののように瑞々しく揺れる乳肉が平たく押し潰されていく。雪のように白かった肌が葎シロップを垂らされたようにほんのりと淡い桜色に染まり始め、乳首粒の色味が鮮やかに変わっていく。

その肌の色の変化が、今、見ている光景が幻ではない現実だと教えてくれた。

（どうして、こんな格好？ あの時も同じって……まさか）

脳裏に蘇る、朝礼の時に覗き見たスカートの中の光景。自然と視線がそこへ向く。

「ん？ ああ、この中も気になるのかい？」

無意識の内に、視線がチェック柄のスカートへ向けられていたのだろう。すぐ目前まで迫ってきていた生徒会長が、自らのスカートの裾を摘み、わずかに口元を緩める。

「いえ、そんなつもりじゃ！ ただ、その……」

「構わないよ。一度見られるのも、二度見られるのも同じ事だからね」

優斗が必死に止めようとする声も聞かずに、舞梨亞はその白魚しらうおのように美しい指で、鮮やかな赤色のチェックスカートを摘む。

パサッ……と小さな衣擦れの音が響き、その少し厚めの布地が、あの朝礼の時以上、腰

の辺りまで大きく捲り上げられた。

「うっ、あつ、ああ……」

眩しい、ほっそりとした雪色の太股。その上に見えた光景は、脳裏に焼きついたあの朝のものと同じもの。首から胸の谷間を通り、真っ直ぐ身体の中心を伸びている縄は、薄い茂みに覆われた恥丘を経て、股間を真っ直ぐ通り抜けていた。

わずかに盛り上がった肉唇。その隙間を強引にこじ開けるように縄が食い込み、薄桃色の小陰唇がチラリと見え隠れてしている。甘酸っぱい、薔薇の花のような香りがふわりと漂ってきて、先程から感じていた眩暈めまいが一層激しくなってしまう。

「どうだい？ 君が先日の朝礼で見た時と、まったく同じだろう？」

「あの……ど、どうして僕が見たって、その……」

こんな恥ずかしい部分を見せつけていても尚、舞梨亜の冷静な口調は乱れない。曝け出された淫らな姿とその物言いのギャップが、より淫靡な雰囲気を感じさせている。

「君は素直な性格なんだろうね。あんなに取り乱した顔を見せられて、気付かない方がおかしいよ。覗けたのはほんの一瞬だったはずなんだけど……随分目ざといものだ」

責める事もなく淡々と言葉を続けながら、淫らに縛られた生徒会長は、頬へ口付けるように優斗の耳元へ顔を近づけてきた。耳たぶをくすぐるように吹きかかる熱い吐息と、スカートの中から漂うものよりは少し薄い、甘美な香り。優斗は落雷に打たれたように全身が痺れ、ただ舞梨亜の言葉を待つ事以外、何もできない。

(どうしよう、やっぱり怒られるよね。そ、その前に僕の方から謝らないと!)

理性がそう訴えるものの、ショックで何も言葉が浮かばず、途方に暮れていた刹那。

「それで……尋ねてきた目的は、私を脅迫に来たという事でいいのかな?」

「……はっ? きよ、きよ、脅迫(ごうどく)っ!?!」

「ふふっ、あの日からずっと君の様子を窺っていたよ。誰かに言いふらす事もなく、何かじつと考え込んでいる様子だったね。それを見て思っただ、掴んだ秘密をどう利用するのかを必死に考えているのだと」

「い、いや、あの! そんなつもりじゃなくて、僕は……」

「年頃の性欲旺盛な男の子が求めてくる事となると、まず間違いなく身体だろう? 私が逆らえない立場なのをいい事に、この身体を思うままに嬲り尽くすつもりじゃないだろうか……そんな事をずっと考えてしまつて、最近は夜も眠れないくらいだったんだ」

荒くなる呼吸に合わせ、上下する美乳。縄で搾り出されたそこを両手で揉み潰しつつ、緊縛姿の生徒会長は、掠れる声で妄想を並べ立てていく。

「違います! あの、お、落ち着いてください、星乃宮会長!」

「遠慮せず、はしたないメスブタとでも呼んだらどうだい? 脅迫する相手に、礼儀を尽くす必要なんてないはずだ。そう言われても、否定できない格好だしね」

「む、無理ですよ! そんな酷い呼び方!!」

「ふむ、それなら、せめて呼び捨てにしてくれ。さすがに丁寧過ぎると興が削(そ)がれる」

「うっ、じゃ、じゃあ、舞梨亞……さん。あの、僕は謝りにきたんです！ なかなか勇気が出せなかったけど、今日、やっと覚悟が決まって……すいませんでした!!」

さすがにいきなり呼び捨ては難しく、モゴモゴと言葉を濁して『さん』付けで呼びかけながら、優斗は深々と頭を下げた。

何だか妙な事になったけど、とりあえず当初の目的は果たせた。ほんの少し気持ちが軽くなったのを感じながら、上目遣いで恐る恐る舞梨亞の反応を確かめる。

「……謝罪？ くくっ、あはははっ！ これは……想像の斜め上をいかれてしまったな」

きょとんと目を丸くしていた舞梨亞が、頬を綻ばせて愉快そうな笑い声を上げる。何があっても平静を保っている生徒会長がこんな大きな笑い声を上げるのは、初めて見る光景。何がおかしいのか理解できず、今度は優斗が目を丸くしてしまう。

「覗いた事をいつまでも言いふらさず秘密にしていたんだ、てつきり、それを有効に使うつもりなのだとばかり思っていたのに……根っから善人なのだね、岸くんは」

「そ、そんな事ないですよ！ 善人なら、もっと早く謝りに……」

「謝ろうと考える事自体が善人の証拠だよ。別に君が意図的に覗きをしたわけではない、あれは風が起こした不幸な事故だったんだ。君が責任を感じるのはお門違いさ」

今まで散々悩み、罪悪感に苦しめられていた。その数日が無駄だったと宣告するに等しい生徒会長の言葉。優斗はポカンと大口を開けて、何も言い返せなくなってしまう。

「何より、今、この姿の私を前にして謝るなんて……くくっ、本当に面白い。だが、本当

に遠慮はいらないんだよ」

そう呟く舞梨亞の手が、恥ずかしそうに火照った優斗の頬を軽く擦り、首筋、そして肩へと滑り落ちてくる。制服のブレザー越しにもわかる、柔らかい手の平の感触。憧れの人

が自分の身体に触れている、その喜びと緊張に背筋を震わせた直後。

「今からでも脅迫して——私を弄もてあそんでみないかい？　こんな風にね」

手首が掴まれ、引つ張られた瞬間。何か柔らかく弛むものを押し当てられる。はち切れんばかりに膨らんだ水風船のような、少し手ごたえのある弾力感。慌てて視線をそこへ向け、自分が何に触れているのかを見た優斗は唇を震わせて絶句した。

「む、む、胸……えっ、ええっ!？」

上下を締めつける縄で、少し平らに潰れた豊かな乳房。ほんのり苺ミルク色に染まった乳肌を包み込むように、手の平があてがわれていたのだ。

思考が完全に停止し、指を動かす事も、突然の行為の意味を尋ねる事もできない。

ただ生まれて初めて触れる乳房の感触を、呆然と味わうのが精一杯だった。

「さっき、随分と熱心に見ていたから、興味があると思ってるね。何せ、こんな秘密を見られてしまったんだ。私は何をされても、黙って従うしかない立場なんだよ？」

凍りつく優斗の顔を見つめながら、緊縛姿の生徒会長はわずかに唇を緩め、優斗の手を更に強く乳房へ押しつけてきた。

指が張りのある乳肌へ少しずつ沈み、その隙間から硬く尖った乳首が顔を覗かせる。

指の先に触れる、荒縄のざらついた感触。それが手の平にしつとりと張りつく肌の滑らかさを際立たせ、こうしているだけで身体が蕩けてしまいそうなくらい興奮してしまふ。

身体がより強張り、自然と指を閉じて隙間の乳首を強く締める形になる。コリコリと小気味よい感触は他では決して味わえない、独特のもの。まるで火がついたように熱くなつていく肉粒は、刺激に反応し、ますます大きく膨らんできていた。

「ふあっ！ んっ、あっ！ い、いきなり、乳首とは積極的だね」

「ご、ごめんなさい！ あの、そういうつもりじゃなくて！ い、今すぐ離します！」

「言っただろう？ 今、私は君に何をされても文句を言えない立場なんだ。遠慮は無用だよ。それとも胸ではなくて、いきなりこちらを、ご所望かな？」

舞梨亜は呟くなり、戸惑う優斗のもう片方の手も掴む。そのまま、少し乱暴なくらいの強さで導かれていく先は——大きく捲り上げられていたスカートの中。

クチュリ……チュプツ……。

「ふえっ、あっ、ええっ!!」

「はひいつ、あああっ！ ンツ……はあ……ふふっ、触っている君の方が先に悲鳴を上げるなんて、おかしくないか？ 本当に、愉快だね……岸くん」

「そんな事言われても、い、今、僕が触ってるのって、まさか……？」

「見てご覧よ。この状況で、私に、それを止める事などできないのだからね」

今まで変化のなかった声の調子が、荒く熱い吐息で次第に乱れ始め、わずかに緩んだ頬

が濃い苺色に染まっていく。憧れの生徒会長のそんな変化を間近で見ながら、優斗は言われるまま、恐る恐る視線を下へ逸らし、捲られた短いスカートの中を覗き込む。

荒縄が深く食い込み、こじ開けられた蜜裂。導かれた指先は、その綻ぶ薄紅色の肉ピラを撫でるような位置へ、しっかりと押しつけられていた。

ゴクリと咽喉を鳴らして湧き上がる唾を飲むと、眩暈がする程の興奮が腹の底から込み上げてきた。いつまでも触れていたい。その衝動を、残った理性をかき集めて抑えて手を引くと、辺りにクチュリと卑猥な水音が鳴り響いた。指先が擦る媚肉を濡らす、トロリとした液感。それが汗や小水ではない事は、女性経験がまるでない優斗にも想像がつく。

「舞梨亞さん、こ、これって……」

「あんっ、何か私のここにおかしなところがあるかい？ それなら遠慮せず、もつとしっかりと確かめてくれていいよ。ほら、邪魔なこれをずらしてえ……んんあっ！」

グチュツ、ニチュリユツ。

手首を掴む舞梨亞に促されるまま、割れ目へ食い込む太い縄を横の方へずらす。

ざらつく縄が敏感そうな粘膜肉を擦る音に合わせ、クールな生徒会長は普段からは想像もできない黄色い声を漏らし、大きく背筋をくねらせた。

割れ目が生き物のように痙攣し、ずれた縄の代わりを求めるように、あてがっていた指先を噛み締める。とても身体の一部とは思えないくらい、焼けるような火照り。少し窪んだ部分が開閉を繰り返し、指の腹がくすぐられてしまう。隠れてよく見えないが、そこ



は割れ目のほぼ中央。純潔の穴口である事は間違いない。

「ひあつ、あんっ！ ど、どうだい？ どこかおかしいところお……あつた？」

段々呂律ろれつが回らなくなってきた舞梨亞が、潤んだ深い色の瞳でじっと見つめてくる。

だが、全身が燃えるように熱くなり、ズボンの中で自らの分身が耐えがたいくらい疼く昂ぶりに襲われている優斗は、最早それに答える余裕をなくしていた。

「何で、あの、ぬ、濡れて？ こんなに動いて……どうして!!」

訳がわからず頭が真っ白になり、咄嗟に口から飛び出した叫び。それが二人きりの生徒会室に響き渡った瞬間、舞梨亞の身体がビクンッと大きく震えた。

指で塞ぐ穴口がキュッと音が聞こえそうな強さで窄み、握り締める乳肌の火照りが増して、球のような汗が浮かんでくる。

小さく開いた赤い唇が震え、強張る表情からは怯えの色がはつきり読み取れた。

「す、すいません！ 変な事聞いて、あの、別に深い意味は……」

「いや……急に、そんな切り口で責めてくるとは思わなかったよ」

「……へっ？」

「どうして、こうなっているか。それをわざわざ私の口から言わせようだなんて……優しただけでなく、意外と鬼畜なところもあるんだね」

言葉尻が消えそうな細かい声で呟きながら、強張っていた生徒会長の頬が緩む。

（何で、会長、こんな嬉しそうな顔を!? 僕、どうしてかって聞いただけなのに……）

予想外の過剰な反応の真意が読み取れずにいる優斗へ、舞梨亜は唇を震わせながら、ポツリポツリと語り始めた。

「岸くん、私はね……どうしようもない、淫乱女なんだ」

「い、淫乱!!」

「驚くのも当然だ。クールな生徒会長だと周りから賞賛されて、その期待に堪えて必死に自分を隠してきたけど……これが、本当の私なんだよ」

段々と声のトーンが上がり、それに合わせて火照る頬がだらしなく緩んでくる。普段、常にポーカーフェイスを保っている姿とはかけ離れた、見ただけで下腹部がジンと熱く盛ってしまうような、淫らではしたくない姿。

口付けをするような距離まで顔を近づけてきた生徒会長に見据えられ、小柄な少年は身体を引く事もできず、ただ視線を泳がせるだけだった。

「冗談ですよ、そんな！ だって、舞梨亜さんが……せ、生徒会長が、そんな！」

「事実だよ。本当は、こんな風に疼く身体を徹底的に陵辱されて……貶められたい。そんな妄想が止まらない、ド変態のマゾブタなんだ。我慢できずに、ほとんど毎日のように、こんな格好で学園に来てしまうくらいにね」

興奮のせいなのか、掠れた声でいつもの倍くらいの早さで捲し立てながら、生徒会長はスカートを胸元まで大きく捲り上げ、その中を見せつけるように腰を突き出す。

「ま、毎日!!」

気を許すと、根元に込み上げてきている熱い感触が尿道を駆け上り、一気に迸ってしま
いそう。歯を食い縛って耐えながら、優斗は憧れの生徒会長へ必死に訴えかける。

だが、今しがたの絶頂の余韻を色濃く浮かべ、歓喜に頬を緩めたままの舞梨亜は、そん
な少年を正面から見据えたまま、甘い声で囁き返してきた。

「お願いだ……早く、この立派なチンポ……入れてえ！ ダメだ、も、もう我慢できない
よ……身体が勝手に動く……チンポ欲しくて、動いてしまおうっ！」

叫んだ瞬間、再び軽く達したように背筋を震わせた舞梨亜が、片手を優斗の首に回して
身体を仰け反らせ、掴んだ剛直を自らの割れ目へ導いていく。

ヌポオツ、ジュツ、ジュブツ！

皺の隙間まで粘り気のある蜜に塗れた花卉の中央。痙攣を繰り返す穴口へ、栗の実のよ
うに硬く大きく膨らんだ龟头が飲み込まれる。

痛いくらいの強さで締めつけてくる熱い粘膜壁。ねっとり張りつく濡れた感触は、こ
うしているだけで表皮が蕩けていってしまいそうな心地よさ。優斗は脳髓が痺れるような
快感を、ガチガチと歯を鳴らしながら紙一重で耐えるのが精一杯だった。

「あぐうっ、ふあああつ！ ま、舞梨亜さん、僕……ひう！」

「はあつ、どうだい？ この蕩けきった淫乱マゾマ○コは。遠慮なく、このまま貫いてえ
……君の専用精液便所にしてくれ」

顔に吹きかかる、甘ったるい匂いの熱い吐息。間近に迫る生徒会長の顔は、先程よりも

更にだらしなく緩んでしまっている。目を大きく見開き、犬のように舌を伸ばして荒く吐息を切らす。見ているだけで、尋常ではない興奮が身体を支配している事が伝わってくる姿。普段のクールさの面影も見えない、快楽に支配された表情。見ているだけでその興奮が自分の身体に染み込んできて、強制的に欲情させられてしまう。

ギチュウツ……又チュツ……。

「あぎいつ、んほお、ふあんんっ！ あはあつ、いいつ、ひ、広がってるよ、き、岸くん、オマ○コの入口い……チンポ、さ、先がグリグリって膨りやんでえっ！」

昂ぶりに合わせて亀頭がますます膨らんできたせいで、入口が真ん丸と、端が裂けてしままいそうなくらい広がっていく。濡れた肉を押し分ける鈍い音に合わせ、言葉にならない乱れた声が部屋に響き、緊縛された少女の肢体がガクガクと痙攣する。

「舞梨亞さん、だ、大丈夫ですか？ あの、少し落ち着いて……」

「こ、こうして焦らされるのが一番辛いっ！ は、早く犯してえ……このまま無理矢理なくらい乱暴に、グリグリと奥うっ、お、お願いれしゅうっ！」

氣遣う優斗の声を振り払うように。舞梨亞はそのシャギーの入った髪を振り乱し、呂律の回らない甘ったるい声でねだり、腰を押しつけてくる。

未だに現実と思えない、乱れ狂う憧れの人の痴態。頭を練り返し横から殴られているようなショックに震えながら、優斗も下腹部の熱い昂ぶりを耐えられなくなってきた。

（いいんだよね？ して欲しいって頼まれてるし、こんなに気持ちよさそうだし……）

頭の中が真っ白になり、理性が崩れ落ちる音を聞きながら、優斗は今まで必死に堪えていたものを叩きつけるような勢いで、思い切り腰を突き出した。

グチュウツ、ズブブウツ、ヌルウツ！ ジュブブオツ！

「んほあつ、ひいっ、あひいっ！ くりゅっ、んっ、きてえっ、ヒふああああつ！」

ミチミチと肉の裂ける音と共に、部屋の外まで響いてしまいうような激しい嬌声が、乱れる生徒会長の口から飛び出した。足を踏ん張れず、優斗に押されるまま後ずさり、窓に大きく背中を預けて喘ぎ狂う。その歓喜に震える姿を見つめたまま、優斗は少女の腰を巻かれた荒縄の上からしつかりと掴むや否や、剛直を力強く蜜穴へ挿し入れた。

「うあつ、こ、これが中の感触……ひっ、あああつ！」

今まで亀頭だけで感じていた、ねっとり絡みつく感触が、根元まで余すところなく包み込んでくる。波打つ熱壁が、剛直を一回り小さく潰すような強さで圧迫してきて、そこに刻まれた細い皺が、竿肌を舐めるように蠢く。

敏感な肉傘や裏筋を中心に、手で扱くだけでは味わえなかった鮮烈な快感が走る。呼吸をするだけでも目の前に火花が散り、尿道を少しずつ昇ってきている熱液が噴出してしまおう。少年は荒く息を切らし、ただそれを必死に堪えるだけで精一杯だった。

(セックス。僕が、星乃宮会長とセックスしてるなんて……夢じゃないんだよね)

決して届かぬと諦めていた憧れの人に、童貞を捧げられた。突然過ぎる展開に戸惑いながらも、込み上げてきた歓喜を嘔み締める。

感触だけでなく、目でも確かめたいと俯いた瞬間。自らの肉幹で真っ直ぐ刺し貫かれた割れ目が、赤い液体で染まっている事に気付いた。

ギチギチに押し広げられた膣口の隙間から滲み出てくるそれは、綻ぶ肉唇だけではなく横にずらした荒縄にも染み込み、鮮やかな真紅色に染めている。

「あの、血が出てますよ!! これ、こんなにたくさん」

「はあっ、あんっ、そ、そうだろうね。初めてはそういうものなのだろう? はあっ、中が焼けるように熱くて、声を出すとジンジンと痛みが響くう……」

「え? あの、舞梨亞さん、そう言えば初めて? え、ええっ!!」

「ふふっ、こんな場所で今日知りあつたばかりの男の子に……じ、自分から頼み込んでレイプしてもらつて……処女をなくしてしまつたんだな、私は。本当に、自分でも嫌になるくらい淫乱の……メスブタあ……ひぎい、はあ……ひんんっ!」

舞梨亞が今にも気を失つてしまひそうなくらい恍惚とした顔で呟く度、膣道全体が狭まり、肉棒が痛いくらい圧迫される。じつとしていられないのか、背中を窓ガラスに擦りつけるように身体を上下に滑らせ、剛直を自ら小刻みに出入りさせ始めた。

「あの、舞梨亞さん、動いて大丈夫? こんな、血が……ひあっ、くっ、擦れるうっ」

「きゃふあっ、んあっ、ああっ! き、気遣う必要がある……顔をしているかい?」

「そ、それは……まあ、気持ちよさそうですけど」

尋ねられ、反射的に答えた瞬間。今、処女を失つたばかりの狭い膣壺が痙攣し、奥から

ゴボリと音が聞こえてきそうなくらい、大量の愛液が破瓜の鮮血と混ざって溢れてきた。

「そ、そう、感じているう……こんな風に処女を奪われてえ、し、しかも窓の傍、見られるかもしれない場所に立たされてえ……はひいつ、感じてえつ、あんっつ！」

「窓……っ!?!」

言われて初めて、優斗はこの立ち位置の不味まずさに気がついた。校舎の最上階とはいえ、窓の外は校庭。体育の授業に励む生徒達の歓声が小さく聞こえてきている。

「誰かがあ……み、見上げたら、すぐバレるうつ。生徒会長なのに……こ、こんな場所でズブズブ犯されてる、いやらしい姿……見られてえ……ひあんっ！」

「あっ、あの！早く、離れて……」

慌てて身を引こうとするが、首に回された腕とガッチリと締めつけてくる膺壺に妨げられて、どうにもならない。

それでもどうにかしようと必死に腰を引くと、奥まで沈んだ肉棒が、熱い壁面を抉るように擦り、入口の方へ抜け出てきた。限界まで広がった入口を肉傘がいやらしく捲り、思わず見入ってしまうような熟れた女の形に変わる。掻き出されたピンク色の淫液がゴボゴボと溢れ続け、濃密な甘い香りが部屋中を包み込む。

「んふうっ、あああつ！そ、それえつ、入口……グリイッて広がるうつ、すごおっ！」

「あっ、すいません！あの、痛かったですか？」

「い、いいいっ、はあ……ははっ、や、優しい顔をして……んっ、その時になったら

大胆に動くなんて、反則うっ、ひぐんっ！」

グチュッ、ズプウッ、ヌリユンウッ!!

声を張り上げながら、淫らに蕩けた生徒会長は、昂ぶりをすべて曝け出すように身体の動きを荒々しいものに変えていく。

割れ目を男根の付け根へ押しつけるように密着させ、そのまま左右に踊るように腰を振り、狭い肉道全体を剛直で掻き混ぜる。

「くっ、あぁっ！　そ、そんなに早くっ、あぁっ、くうっ！」

蕩けそうな肉壺の感触に加え、根元の辺りが横にずれた荒縄で強く擦れ、快感は増していくばかり。少しでも身体の力を抜いた瞬間、暴発してしまいそうなくらいだ。

「岸くん、もつと激しくうっ！　そ、それにき、氣遣いはいらなから、もつと容赦なく汚い言葉で詰なつてくれ。見られそうな場所で、無理矢理初めてを奪われて、あ、喘ぐう、変態女の事を……はひいつ、んひいつ、んんっ！」

自らを容赦ない言葉で罵倒する度、膣道が大きく震えるのが、搾り取られるように締めつけられた剛直に伝わってくる。こうして目の当たりにしても尚、未だに現実感が湧かない、憧れの生徒会長の本性。甘い快感に包まれて意識が酩酊し、何も考えられなくなってきた少年は、ただ想い人の願いに応えたいと腰を振り始める。

「は、はい！　凄くエッチで、変態で……こ、興奮します！」

「らめえ、そ、それじゃ足りないのお！　もつと、淫乱のマゾブタあ……チンポ狂いの変

態女だって、苛めて……ひぎいつ、チンポオ！ チンポでしつけてえっ！」

「ううっ、そ、それじゃ……淫乱！ メ、メスブタ……もつと苛めてあげるよ！」

「そ、そおっ！ あはあつ、うれひい……ひんんっ！ ごめんなしゃあ……いいつ、へ、変態れえ……はひいつ！ 縛られて……ズブズブ突かれるのしゅきいつ、くんんっ！」

望まれた通りの罵倒の叫びに、舞梨亜の歓喜の声が被さる。

くねる身体の動きも激しさを増し、縄で搾り出されて歪に潰れた双丘がたふんたふんと悩ましく揺れる。激しい突き上げで縄目が緩み、少しずつずれてくる。火照り、ほんのりと桜色に染まり始めた肌に刻まれた、真つ赤な縄の跡。普段の生真面目な姿と違う、今の淫靡にだらしなく崩れた顔には、それが不思議なくらいよく似合って見えた。

「全部、見られてるうっ。いっぱい犯されてえ喜んでる、エッチな顔まで。こ、こんなの見られたらあ……もう、私、君の奴隷にならなきゃ生きていけない!!」

「い、いや、そんな事は！」

「ダメえ……ちゃんとやってくれ！ 君の奴隷になれとおっ……何でもする、ド変態奴隷になれってえ……命令して……あ、証あかしに熱いの、注いでえっ、んあつ、ああつ！」

熱い叫び声と共に、首に回された手に力が籠り、長い脚が両足の動きを遮るように絡みついてくる。ピストンで掻き混ぜられ、泡立ったピンク色の愛液に塗れた肉唇。そこも剛直を決して離さないとばかりに窄む。

（まさか、このまま中に射精しろって、そういう意味？）



まだ割りきれない部分はあるけど、この求めに応えないわけにはいかない。ただその一心で前に踏み出した小柄な少年は、切なげに屹立を求める割れ目へ亀頭を押しつけた。

——ズプウツ、ジユブブズプツ、ズプウツ！

食い込む細紐を横へ押し退け、木の実の如く硬く膨れた亀頭が、身悶える副会長の膾壺を真っ直ぐに刺し貫く。全体にねっとり絡みついでくる、熱く蕩けそうな膾壁。その恥ずかしい姿を見つめられていただけで、膾道は奥まで熱い蜜液に濡れ塗れていた。

「凜菜さん、凄いです。熱いのが絡みついてきて……うあつ!!」

「んくうつ！ み、皆さんの前で……優斗さんの太いオチンチン感じてますう！」

小刻みに蠢く肉皺に表皮をくすぐられ、早くも達してしまいそうな悦楽を感じながら、優斗は夢中で腰を振り動かす。溢れる愛液を掻き出すように、ゴリゴリと壁面を抉る強さで剛直が入りする度、淫らな下着に身を包んだ副会長が狂おしく喘ぎ乱れる。

「ふふつ、容赦ないね、ご主人さま。いきなり、そんなに激しく突きまくるなんて。凜菜のオマ○コがはしたなく捲れて……今にも壊されてしまいそうじゃないか」

「いいなあ、いっぱい突いてもらつてえ。凜菜先輩、凄く気持ちよさそう」

「ああ、ま、舞梨亞ちゃんも杏樹ちゃんも、そんなに言わないで……ひあつ！」

見守る幼馴染と、肌を重ねる後輩の興奮に上擦った声に反応し、ソバージュヘアの乙女はもどかしげに背筋をくねらせながら嬌声を漏らす。膾内は小刻みに収縮を繰り返す、素早く往復する肉棒を食るように求めてきていた。

今までのように人目を忍んで、ばれるか否かのスリルを楽しむのではない。肌を堂々と晒し乱れる、今まで実現できなかった妄想が現実になっているのだ。しかも、見守っているのは顔見知りの仲間達ばかり。その羞恥の快感は尋常ではないようだ。

「もうイキそうなのかい？ まったく、見られてこんなに感じるなんて、私に負けられないの変態女だったんだね、凜菜は。ご主人さまもそう思うだろう？」

「えっ、あっ、そんな……えっと、そ、そうかも……」

同意を求められた優斗は、一瞬言いよどみながらも頷き返す。もっと恥ずかしがらせて悦ばせてあげよう。見つめてくる潤んだ瞳が、そう懇願しているのに気付いたからだ。

「ご、ごめんなさい、優斗さん……ひあつ、こんなはしたない女でえ！ ああつ、でも止まらないんです。み、見られて感じるのお、好き……ひいっ！」

舞梨亜の思惑通り、その罵倒の言葉に敏感な反応を見せた爆乳のお嬢さまは、長い髪を振り乱すように全身を痙攣させ、一気に昇り詰めていく。

竿肌に張りつく膈壁が一回り小さく窄み、その舐めしやぶられるような刺激で射精の欲求が耐えきれないくらい燃え上がった——刹那。

「ダメエ！ ボクも我慢できない、つ、次、ボク！ もう交代してよお！」

上に覆いかぶさったポニーテールの少女が、そう叫ぶや否や、ずり下ろしたブルマから露出する引き締まった美尻を、優斗のお腹へ力いっぱい押しつけてきた。

絶頂の予感に脱力していた少年は踏ん張る事もできず、その勢いで数歩後ろに仰け反っ

てしまふ。狭まる肉壺の中から滑るように抜けた肉棒は、間近まで迫っていた絶頂を惜しむように、ビクビクと力強い脈動を繰り返していた。

「ふあ、ああっ！ 杏樹ちゃん、酷いです。わたくし、もう少しでしたのに……」

「だって、凜菜先輩の気持ちよさそうな顔、近くで見せつけられて……我慢できないよ」
悲しげに抗議する先輩へ、快活な少女は拗ねたように唇を尖らせて返す。

「やれやれ、順番を待つくらいできないのかい、橘高くん？ 我侬が過ぎるよ」

背後で成り行きを見守っていた舞梨亞が、呆れた声で呟いた瞬間。それを待ちわびていたように頬を緩めた杏樹が、振り返りざま訴えてくる。

「我侬で……イ、イケナイ子だよ、ボク。舞梨亞先輩、岸先輩、だからあ……」

声を押れさせたポニーテールの少女は、大きく腰を浮かせ、その美尻を誘うように左右へ振り始める。わずかに開いた尻房の谷間から覗き見える秘裂。真下に並ぶ凜菜のものよりも肉皺が少なく色も薄い割れ目全体が、既に愛液が滴る程に濡れ塗れていた。

「えっと……お仕置き……かな？」

その声と秘所を見れば、被虐を愛する少女が何を望んでいるのかは明白。だが、他人の目の前でいつもしているような乱暴な行為をする事が躊躇われ、すぐには手を出せない。

そんな優斗の代わりに、隣で自らの鞆の中を探っていた生徒会長が言葉を返した。

「そうだね。我侬を反省してもらおう為に……きついお仕置きが必要なようだ」

呟きながら前に踏み出した紫髪の乙女が、いきなり手に持っていた何かを振り下ろす。

——パチイイイインッ!

「ヒギイッ!? くあつ、はあつ、んつ、あぎいつ、あああつ!」

部屋中に響く悲鳴と、平手とは比べ物にならない強烈な打撃音。そのひと叩きで、突き出された白い尻尻に、血が滲むような細長いミミズ腫れができ上がってしまった。

「つて、あ、あの、舞梨亞さん、何を! それ……」

予想外の威力に目を見開いた優斗は、慌てて舞梨亞が手にしているものを確認する。手に持たれているのは、黒光りする長い棒状のもの。平たく膨らんだ先端部分がしなっているそれは、競馬のジョッキーカーが持っているような鞭だった。

「この服を買う時、目に付いたので一緒にね。ふふつ、想像していた以上の威力だ」

先端部分の感触を確かめるように摩りながら、生徒会長は口元に小さく笑みを浮かべ、荒く熱い吐息を切らしていた。後輩を鞭で責める行為に興奮しているのか、それともこの強烈な一撃を自らが受ける時の事を想像し、昂ぶっているのか。時折、こちらへ期待に輝く視線を向けてきているから、おそらくは後者の気持ちの方が大きいだらう。

「ま、舞梨亞先輩い……ボクう、はあつ、あふつ、ああつ!!」

「そんな目で見なくてもわかつているよ。もつとお仕置きが欲しいんだらう? ほら」

パチンッ! パチンッ!!

一度、二度。振り返り見る子猫のような可愛らしい瞳に促されて、生徒会長の持つ革鞭が突き出された美尻を繰り返して打つ。乾いた音と同時に尻肌へ赤いミミズ腫れができ、何

本も折り重なったそれが格子状の模様を作り上げていく。

「あの、舞梨亞さん、さすがにやり過ぎじゃ！」

「それほどでもないよ。普段、君がお仕置きする時は、お尻が腫れて座るのも辛いくらいにしているそうじゃないか。第一……これが、嫌がつているオマ○コかい？」

そう答えながら、舞梨亞は縦筋へ黒光りする鞭先を食い込ませる。その刹那、杏樹の小さな呻き声と共に、クチュリと卑猥な水音が響き聞こえてきた。そこを濡らす愛蜜は、ますます増えてきている。小さく口を開けた腔穴から滝のように滴るそれは、割れ目を伝って流れ、下の方で物欲しげに震えている凜菜の蜜裂にまで垂れてしまっていた。

「ふふっ、感じます、杏樹ちゃんの熱いお汁。本当にお仕置きが大好きなんですわね」

「う、うん！ ごめんなさい……お仕置きでエッチになる、ヘンな子でえ……あん！」

自らが組み敷く爆乳の先輩の言葉に反応し、杏樹は大きく背筋を仰げ反らせる。

鞭で断続的に突かれる割れ目は刺激に合わせて開閉を繰り返し、早く埋めて欲しいとねだつてきているようだ。

「もお、む、無理い、我慢できないよお！ 岸先輩もお仕置き……い、いつもみたいに太いオチンチンで、ボクのオマ○コ、壊れるくらいお仕置きしてえ！」

「あんっ、ダメですよ杏樹さん。わたくしも途中でやめられて、身体中が熱く疼いて我慢できないんです。わたくしが優斗さんに突かれて淫らになるところを見ていてください」

切羽詰まった声で、同時に肉幹を求めてくる二人の美姫。戸惑う少年の情欲を煽るよう

にして、鞭で赤い痕が刻まれた美尻と肉付きのよい艶やかな桃尻が左右に振られる。

「そ、そんな事言われても、僕は一人しかいないし、その……」

縦に並んだ割れ目は競いあうように開閉を繰り返して、甘ったるい蜜液を滴らせている。漂ってくる甘酸っぱい香りに包まれながらそれを見てみると、すぐ隣で恋人になったばかりの生徒会長が見つめているというのに、昂ぶりを抑えきれなくなってきた。

「悩む事はないさ、岸くん。君が私達のご主人さま……すべての決定権を握っているのだからね。思うままに振舞って、リードする姿を見せて欲しいな」

少年の躊躇いを見抜いたように、手で鞭を弄んでいた紫髪的美姫が促してくる。

気にかけていた恋人から与えられた言葉に、興奮を抑えていた理性がプツリと切れた。

「わ、わかりましたよ！　じゃあ、順番にっ!!」

思考を放棄し、半ばやけくそ気味に叫ぶや否や、優斗はまずは赤いミミズ腫れだらけになった杏樹の美尻を両手でしっかりと掴み、その小さな肉壺へ滾りを強引にねじ入れた。

「ひゃんっ！　あぎいっ、きたあ……太くて苦しいのおっ！」

未だに処女の頃と変わらない、その小柄な体格に比例した狭い肉壺。膣壁の皺が伸びきるくらい押し広げて奥まで突き込むと、溢れる甘酸っぱい蜜液の匂いが強く漂ってきた。

普通ならば馴染むまでゆつくりと動くところだが、このポニーテールの快活な少女を満足させるには、それでは物足りない。

優斗は少し力を入れると折れてしまいそうなくらい細い腰を掴むと、ミミズ腫れの広が

る尻肌へ腰を叩きつけるような勢いで、膣道全体を激しいリズムで掻き混ぜていく。

「あぐうつ、ヒギツ！ ああつ、あふうつ！ いい、んんー！ オマ○コ、裂けちゃいそうなくらいキツキツでえ……イイツ！ これえ……頭がボーつとしちゃうくらい息苦しいの大好きい……岸先輩のオチンチンでお仕置きしてもらうの、一番しゅきいっ！」
「まあ、いきなりそんなに強く……それで感じてしまうなんて、杏樹ちゃん、本当にエッチで可愛らしい……ああつ、優斗さん、わ、わたくしもおっ！」

跳ね上がる杏樹の甘声に触発され、下になった爆乳の副会長が今一度ねだってくる。先程貫いていた余韻が残り、まだ少し口を開けたままの卑猥な膣穴。その狂おしい求めの言葉に合わせて開閉を繰り返すそこを見ていると、その思いに応えずにいられなくなる。

「待っていてください、今、入れる……うぐつ、くうっ！」

押し潰されそうな締めつけに少しの名残惜しさを感じつつ肉棒を引き抜き、間髪入れずに蠢く凜菜の膣壺へそれを押し込む。

「ひふあああつ！ 優斗さんのオチンチン……子宮まで届いてますう！」

「だって、凜菜さんのオマ○コが凄く動いてて、奥の方まで勝手に飲み込まれちゃうんですよ……い、いつもより熱くて……きつくて……くうつ、ああ！」

副会長の歓喜の声と共に、熱く蠢く膣壁が竿肌に張りつき、そのままグイグイと子宮の方まで引き込まれる。染み出てくる滑る愛液の量は剛直全体が濡れ塗れる程。今までに交わってきた中でも、最も敏感で貪欲な反応に戸惑いすら覚えてしまう。

「だって、素敵なんですう、これ！ こんな恥ずかしい格好で、優斗さんに子宮まで愛してもらっている姿を、舞梨亞ちゃんや杏樹ちゃんに見られているなんて……頭がおかしくなりそうなくらい恥ずかしくて……と、とつても気持ちよくなつてしまえますうっ！」

上擦る声と共に、亀頭が埋まる子宮口から膣道全体が大きく蠢き始めた。火傷しそうなくらい火照った肉壁の皺が、張りつく竿肌を舐めしゃぶる。剛直全体が少しづつ溶かされていくような恍惚の快感にうっとりとする優斗同様、爆乳の副会長も大きく見開いた瞳に恍惚とした妖しい光を浮かべ、羞恥の甘美に酔いしれていた。

「まったく、二人とも……私が呆れる程に淫らだよ」

「ごめんなさい、ボク悪い子でえ！ だから、もつともつとお仕置きい！」
「ああ、舞梨亞さん。見て……も、もつとわたくしのはしたない姿あつ！」

交互の挿入で身悶える美姫達を煽るように、大げさに嘆いてみせる紫髪の生徒会長。彼女の呆れたような眼差しと断続的に振り下ろされる鞭が、被虐で悦ぶ快活な乙女と、視姦を好む優しげなお嬢さまを更に昂ぶらせていく。

「本当に……みんな、エッチ過ぎます！ 僕も、もう我慢できない！」

散々痴態を見せつけられた小柄な少年も、いい加減に理性が言う事を聞かなくなり、ただ本能の赴くまま、腰を振るだけになっていた。

元気に、力強く締めつける狭い肉壺。全体が熱く包まれ、蕩けてしまふような肉壺。二人の性格を表すようなそれぞれの蜜穴の感触を交互に休みなく突き、高まつていく。

「あぐうっ、あああつ！ いいよおっ、岸先輩、突いて……ま、舞梨亞先輩と二人で一緒にお仕置きい、もつと、もつとおつ！ 舞梨亞先輩に、お尻ペンペンって叩かれるのもお……岸先輩のオチンチンでオマ○コいっぱいにされるのもお、ど、どつちもイイッ！」

「わたくしもお……皆さんの前で、優斗さんのオチンチンを受け入れて、は、はしたない声を上げて……あああつ、素敵……こうして見られながら優斗さんと交わるの、恥ずかしくて気持ちよくて……もう、我慢できません！」

優斗の力強い突き上げを受け止め、全身をシェイカーのように揺らしている美姫達の間から、狂おしい嬌声が休みなく上がる。動きに合わせ、重なる美乳と爆乳が柔らかく弛みながら揺れ動く。凜菜のそこを辛うじて隠していた小さ過ぎるブラジャーはとつくに下乳の辺りまでずれてしまっていて、あらわになった硬い乳首粒同士が擦れ、更なる快感を乙女達に与えているようだった。

「あああつ、優斗さん、このまま中に……わたくしが優斗さんの精子を受精している姿を、皆さんに見ていただきたいです。ですから、は、早くう！」

「ダ、ダメっ！ 岸先輩、いつもみたいに熱いので、ボクの子宮にお仕置きして！」

絶頂が間近に迫った二人から、ほぼ同時に投げかけられた求め。二人の異なる蜜壺の感触に酔いしれ、既に身も心も夢見心地に蕩けている少年には、どちらに應えればいいかを考える余力も残っていないかった。

「もう、で、出る!! 二人で分けてください！ これ……ううっ、あああつ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評発売中

**少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!**
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

【小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪乃】

思春期なアダム4 聖域の崩壊



【小説・蒼井村正 / 挿絵・或十せわか】

全国書店で
好評発売中

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす新たな敵の登場!**



【小説・羽沢向 / 挿絵・ヒエール☆よしお】



全国書店で
好評発売中

**クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?**
ルルらちに新たな邪神が這い寄る!

【小説・羽沢向 / 挿絵・ヒエール☆よしお】

魔海少女ルルイエ・ルル2

既刊LINEUP

- 仙道学園戦姫 / ノブナガ! ①~③
- ビルグリムメイデン ①~③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!

- 借金お嬢クリス ①~③
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!